

第11回登別市総合計画第3期基本計画市民検討委員会育み部会議事録

- ◆開催日時 平成26年11月20日（木） 17:30～19:00
- ◆開催場所 第1委員会室
- ◆出席部会員
部会長 安宅 錦也
副部会長 川村 正勝
部会員 仲川 弘誓
合田 美津子
佐藤 文子
磯田 大治
佐藤 史彦（庁内検討委員会 部会長）
【教育部次長】
千葉 浩樹（庁内検討委員会 副部会長）
【教育部社会教育G総括主幹】
- ◆欠席部会員
- ◆事務局 上野総務部企画調整G企画主幹
- ◆議題 「第5章 豊かな個性と人間性を育むまち」について

〈部会長〉

それでは、第11回目の育み部会を始めたいと思います。
事務局から前回の説明をお願いします。

〈事務局〉

前回ですが、体系図の最後の部分の「施設整備の推進」につきまして、整備面、活用面からいろいろとお話をいただきました。

内容としましては、一つの地域の中にプールがあって公園があってというように、いろいろな施設が同じ地域に整備され、コンパクト化されると利用率も高まり活性化されるのではないかというご意見等をいただきました。

それで、体系図がひと通り終了しましたので、また最初に戻って、第1節から提言書をまとめるためのポイントですとか、キーワードを拾っていくということを確認させていただきました。

この中で、シルバー人材センターの活用、老人の居場所づくりと老人憩いの家の果たす役割、町内会の活用、地域コミュニティの見直し、などが第1節のキーワードとして挙げられ、まとめとしては「町内会活動を活性化させ、地域コミュニティの繋がりをもう一度見直すことが生涯学習に繋がっていき、そこに健康寿命を延ばすという

考えや、シルバー人材センターの活用といった様々なアイデアが盛り込まれることで地域の活性化に繋がっていく」というお話だったと思います。

今日は前回の続きから進めていきたいと思います。

〈部会長〉

それでは、今日は第2節「学校・家庭・地域と連携し心豊かな人間性を育む」から入っていききたいと思います。

以前の話の中では、国際観光都市としての登別ということで、キーワードとしては「国際人の育成」ということが挙げられていたと思います。

また、生涯学習の中で体力向上を図ったり、生きる力を育むために知・徳・体の3つのバランスを図るということでお話をいただきました。

あと、「豊かな心を育む教育の充実」のところでは、学校図書館の活用方法等についてもお話をいただいたところです。

後半の体力づくりの部分は施設整備とも絡んできますし、総合型スポーツクラブなどについてもキーワードになってくるのかなと思います。

では、第2節のⅠ「子供たちの生きる力を育む」の部分で、このキーワードをもとに提言書に盛り込む内容についてのご意見をいただければと思います。

〈部会員〉

先日、教育委員会の方と会う機会がありまして、そのときに学校司書配置後の子どもたちの変化について聞いてみたところ、驚くほど反応が良くなったと言っておられましたが、やはり、司書教諭のみで学校図書館を管理・運営していくのは難しいということが改めて分かりました。

熱心な方ということもあり、非常に効果が上がっているとのことでした。

また、学校図書館と市立図書館が連携していくということも大切だと思いますし、財政面が厳しいのは分かりますが、少子化のことを考えると子どもたちへの投資は減らすべきではなく、増やしていくことが大切だと思います。

学校司書の配置というのは、直ぐに子どもたちの力になるという訳ではありませんが、読書を通じて人格形成に大きく影響するものだと思いますので、活字文化の継承・定着のためにもぜひ続けてほしいですね。どこかに盛り込んでほしいと思います。

〈部会長〉

学力向上に向けて、読書環境や学校図書館の充実というのは欠かせないということですね。

これについて次年度の配置というのはどうなっていますか。

〈市庁内部会部会長〉

現在は嘱託員1名と臨時職員1名の2名を配置しており、一人が2校ずつ受け持つ

という形になっていますが、次年度はあと2名増やしまして、嘱託員2名、臨時職員2名の4名体制で進めていく考えです。

これで小学校の8校すべてが網羅されることとなります。

〈部会員〉

この事業は効果が出ているということなので、10年間変わることなく続けてほしいですね。

〈部会員〉

体育コーディネーターも、現在4校しか入れていないので8校に入れるようお願いします。

この10年間で体力向上を図る意味でも、ぜひ人材を確保して配置していただければと思います。

〈部会員〉

配置されている学校と、されていない学校との間に格差が生じないように進めていく必要があると思います。

あと、放課後サポートも続けたほうがいいと思いますし、地域全体で取り組みことが大切ではないかと思います。

〈部会長〉

この部分については、コミュニティスクールの中で学校支援本部事業からコーディネーターの方に入っていて、それぞれの学校の中で出来る範囲で取り組みを進めてきているところです。

9月、10月から3校ほどサポートが始まりまして、月に2回ほど来ていただいておりますが、これについてはコミュニティスクールが定着する中で、地域の方々に協力をお願いしながら進めていく形になると思います。

知・徳・体の3つの部分についてそれぞれお話をいただきましたので、これらを整理して盛り込んでいただければと思います。

あと、第2節のⅠ「子供たちの生きる力を育む」の中で何かありますでしょうか。

〈部会員〉

子どもたちの貧困率についてのデータを学校は持っているのですか。

〈部会長〉

データとしては持っていませんが、就学援助の申請件数や生活保護世帯の数は少しずつ増えてきていますね。

〈市庁内部会部会長〉

準要保護について言えば、登別市の場合は他のまちよりも手厚くカバーしていると思います。

〈部会員〉

母子家庭、父子家庭の割合のデータは取っているのですか。

〈事務局〉

そうした統計的なものは取っていないと思います。

〈部会員〉

家庭の所得と学力の相関関係についてはいろいろと言われていますが、実際はどうなのでしょうか。

〈部会長〉

一般的にはそう言われていますが実際にデータを取っていないので、推測になりますね。

〈部会員〉

そうしたデータも取っておく必要はないでしょうか。

〈事務局〉

個人情報保護の問題がありますので、その統計事務のために税の所得情報を使うことは難しいですね。

〈部会長〉

学力の部分で学校が重視しているのは、家庭での学習習慣の定着ということですね。今、全道で取り組んでいるのが「早寝、早起き、朝ごはん」という運動なのですが、これは、もう一度原点に戻って考えてみようということで、子どもたちにきちんと朝ごはんを食べさせて学校に行かせてくださいという考えです。

このデータはありまして、朝食を食べてくることが学力の向上に繋がるということはデータ上も示されています。

それと、読書の部分では家読ということが奨励されておりまして、家庭で少しでも本を読むことを習慣付けようという取り組みです。

〈部会員〉

文字文化の定着ということを考えると、学校と図書館の果たす役割はものすごく大きいと思います。

これは学力とも連動していると思いますし、そこに人と金を投入するということを社会資本整備の一つとして進めるべきではないかと思います。

〈事務局〉

学校図書館の整備についてですが、図書館には各学校のクラス数に応じて整備しなければならない蔵書数というのが決められておりまして、残念ながら市内の小中学校全校がこれを充足している訳ではありません。

もちろん毎年所要の予算付けはしているのですが、充足率に達しない背景には図書館のキャパシティの問題があって、物理的に蔵書が収納できないといった理由があります。

〈部会員〉

図書館にも参考書や学習資料があって、そこにボランティアや教育相談員のような人を置いて、サポートしてもらえるようなシステムがあると、子どもたちの学習の場としてだけでなく、居場所づくりにもなりますからね。

〈部会長〉

ここまでの部分についてはこれでよろしいでしょうか。

では、次の施策のⅡ「地域に根ざした魅力ある学校づくり」に進みたいと思います。

ここは、登別版コミュニティスクールとして現在進めているところでありまして、その中では三曲協会の方々にも来ていただき伝統文化を披露してもらったりしていますが、コミュニティスクールについても、やはり協力していただける方の人材確保の部分はなかなか難しいものがあります。

地域の方が、やりがいを感じていただきながら学校と一緒に頑張って行ける体制を作り上げていくのが目標ではないかと思っていますが、この部分について何かご意見等ありますでしょうか。

〈事務局〉

教育の日に合わせて毎年「ふれあい DAY」を実施していたと思いますが、コミュニティスクールが始まってから、地域の方の関心は高まりましたか。

実際の来校者数は増えていたりしているのでしょうか。

〈部会長〉

実際に増えました。

今回は土曜授業に併せて行ったということもありまして、前年より500人ほど増えました。昨年が900人ほどで今年が1,400人ほどでした。

土曜授業への関心ということもあるのですが、それだけ地域の方の関心が高かったのだと思います。

〈部会員〉

1 ページ前に戻りまして、I 「子どもたちの生きる力を育む」の部分で、知・徳・体の総合力が生きる力になるというお話があったと思いますが、一方で学習指導要領にも「社会に出て生き抜く力を身に付けさせる」という項目があったと記憶しています。

次ページのコミュニティスクールの中で、実際に社会に出て行くということを想定し企業に入ってもらい、というような取り組みを行っているのでしょうか。

〈部会長〉

職業体験、職業訓練ですか。

〈部会員〉

1. 職業体験に行くのではなく、学校教育の現場、例えば企業の中でコミュニケーションスキルを持っている方を土曜授業に登場させるなど、いろいろな切り口で企業におけるCSR（Corporate Social Responsibility：企業の社会貢献）と連携できれば、10年後に地域人材が高齢化したとしても、うまく対応できるのではないかと思いますがいかがでしょうか。

〈部会長〉

職業訓練の部分については、中学の1年生か2年生のときに職場体験として、2日、3日の日程で引き受けていただける企業に行き、実際にその職を体験するというカリキュラムを組んでいます。現場から来ていただいて、ノウハウやものづくりの指導をしてもらうところまでは行っていないというのが現状です。

あと、企業の職場内研修やOJTといった部分とも関わってくるのだと思いますが、一般企業の方が持っているノウハウを学校や子どもたちに伝えていくことが、生きる力の育成という部分では大切になってくるのではないかと思います。

〈部会員〉

また1ページ戻りますが、④「情報機器の効果的な活用」の部分で、ICTの指導についてもプロの方に任せることが可能だと思いますが。

〈部会長〉

ICTについては、現場の先生方にもなかなか浸透していないのが現状ですね。個人差がかなりあると思います。

〈部会員〉

民間企業には研修プログラムもあるようですね。

〈部会長〉

民間企業の方に現場に来てもらい、情報に関する話をさせていただくという取り組みも、各小中学校で少しずつ行われてきていますが、携帯やインターネットなどについての情報モラルの教育は生徒指導上の問題からでも大切となりますので、協力していただける民間企業と連携しながら今後も進めていきたいと考えています。

〈部会員〉

市内の小中学生の携帯の保有率はどれくらいなのでしょう。

〈部会長〉

小学生はそうでもありませんが、中学生になるとかなりの人数が持っていますね。高校では持っていない子のほうが少数になります。

ラインなど我々が手を出せないものが年々増えてきているので、ますます対応が複雑化し難しくなっています。

〈部会員〉

トラブル防止のためにも情報モラルの教育というのは大切ですね。

〈部会員〉

持っているのが当たり前、というように考えて教育していかなければならない時代になってきているのではないのでしょうか。

〈部会長〉

これからは、親への教育ということも行っていく必要があると思いますし、例えば私のところでも、次の参観日に子どもと親向けの携帯電話のモラルについての教室を開く予定です。

ある意味、今一番困っているのは保護者ではないかと思っています。子供どうしのやり取りに親が入っていけなくなっています。

だからこそ、子どもたちにしっかりとしたモラルを持たせるための教育というものが必要となるのではないかと思います。

〈副部会長〉

本来であれば、親が家庭で子どもに教えていかなければならないモラルの問題も、親に知識がなければ教えることができないですから、当然家庭でのモラル教育というものも上手くできなくなっているのだと思います。

〈部会長〉

親がついて行けなくなってきました。

〈部会員〉

小学生や中学生でも意見交換するとき手法をとして、ワークショップやディベートのようなものを取り入れてみるのも面白いのではないかと思います。

頭が柔軟なので受け入れられると思いますが。

民間企業でも積極的に取り入れているところがありますので、そういう人たちに来てもらい面白いテーマを選んで指導してもらおう、といったこともアイデアとして考えられるのではないのでしょうか。

〈部会長〉

今は小学生にもディベートをやらせておりまして、社会に出てからも役立つような体験をさせてあげたいと思いますね。

〈部会員〉

地域づくりも、大きな視点で考えたとき、学校関係者だけで固まっているのではなく、壁を取り払っていろいろな人が入りやすくする環境を整えることで何かが生まれてくるのではないかと思います。

〈部会長〉

今お話しされた部分が地域コミュニティということになりまして、学校を中核としたコミュニティづくりをこれから進めていこうとしています。

〈部会員〉

青年会議所と連携して一緒に考えてみるのも面白いかもしれませんね。

〈部会長〉

J Cの会議を小学校でやらせて欲しいという依頼がありました。

富岸公園をフィールドとして子どもたちとJ Cと地域の皆さんで何かできないか、という内容だったのですが、J Cには一度事業を行っていただいております。

こういう取り組みが今後少しずつでも広がっていけばいいなと考えています。

〈部会員〉

校長会や教頭会の中でそういう話が出たりすることはないのですか。

〈部会長〉

コミュニティスクールについては、市教委と校長会や教頭会が連携を図りながら行っていますが、まだ始まったばかりですので各学校とも手探り状態といったところですね。

第2節のⅠ「子供たちの生きる力を育む」の部分については、皆さんから一通りご意見をいただいたのかなと思います。

次のⅡは、「地域に根ざした魅力ある学校づくり」となりまして、コミュニティスクールのことについて触れています。

Ⅲについては、「教育環境の充実」ということで、安全の確保と研修機会の部分にも触れています。

〈事務局〉

登別は国際観光都市でもありまして、多くの外国人観光客が訪れるまちでもあるわけですが、共通言語といってもいい英語の教育については、今後どのように進めていけばいいのでしょうか。

あと、市長も英語教育の充実には非常に興味を持っているところでして、現在4人いるALTを今後小中学校の中でどのように活用していけば、特色ある取り組みとして登別の英語教育の充実が図られるとお考えですか。

〈部会長〉

英語教育の計画が今年策定されまして、ALTについては小学校2名、中学校2名の計4名を配置していただいています。

来年度から指導内容が一部改定されますが、次の学習指導要領の改訂に合わせて、英語活動がこれまでの小学校5・6年生から3・4年生にまで下りてくることになります。

これは、移行期間の中で取り組んでいく部分もあるのですが、より実用的なコミュニケーション、英語を通じたコミュニケーションづくりというものも出てくることになりそうです。

今、小学校のALTは5、6年生だけではなく、低学年にも入って英語に関わる活動を続けてもらっています。

この部分については、他のまちよりも恵まれていると思います。

〈部会員〉

教員の資質向上について、現場ではどのようなことが行われているのでしょうか。

〈部会長〉

教員の資質というのは子どもたちに影響する部分でもありますので、職場研修の充実というのも重要になってくると思います。

特に登別は、他のまちと比べて若い先生が多いですから、職場内でスキルアップを図っていくことは大切だと思います。

〈部会員〉

体育コーディネーターとして小学校に入ってみて驚いたことがあったのですが、それは職員室にほとんど先生がいないということでした、これはびっくりしましたね。

小学校は学級担任制なので、先生は一日中教室にいるのが基本となります。

休み時間も子どもたちと遊んだり給食指導もしていますから、職員室にいることはほとんどないですね。

これが中学校になると教科担任制となるので空き時間ができますから、職員室に先生がいたりしますけれど。

放課後サポートというのも、地域の方に子どもたちをみてもらって、その間少しでも先生方の時間を確保しようというのが目的でもあります。

そうすることで、週に1度でも2度でも違う形で子供たちと接することができまして、学習指導ではなく教育相談とか悩みを聞いてあげる時間を取るとか。

〈部会員〉

中学校の部活を外注することはできないのですか。

〈部会長〉

外部講師の導入ということで進んではいますが、なかなか難しいところですね。

〈部会員〉

トップアスリートを派遣して中学校の部活動を支援するという北海道の事業が始まったのですが、残念ながら市内の中学校で手を挙げたのは1校だけでした。

ただ、実際にその事業に手を挙げたところに聞いてみると、活動の質は高まるものの先生方の負担が減るわけではなく、むしろ講師への対応等で負担増になってしまったというのが現状のようです。

〈部会長〉

やはり、部活動そのものをすべて外部に出してしまうというのは難しいことだと思います。

〈部会員〉

前にも言ったと思いますが、厚労省で進めている健康増進と文科省で進めているスポーツの考えとは基本的には同じ概念なのです。

そういう重複した部分の予算を集めてくると、何人かの人材を地域で賄えると思っ

ていますし、例えば、健康運動指導士とスポーツクラブプログラマーというものがそれに該当するのですが、内容としてはほとんど同じことを行っています。

厚労省の方は少し医学的な部分が入るだけですから、メタボリックシンドロームの改善などと言えれば必要かもしれませんが、地域の皆さんが健康になる運動指導はどちらが行っても変わらないはずです。

それをそれぞれが予算取りをして使ってしまったのが現状です。

そうした省庁間の壁を取り払って集約していただけるなら、地域の中で運動指導者を雇用できるような仕組みも作ることができると私は思っています。

〈部会員〉

今後の10年間を考えたとき、女性の働く環境というものもかなり変わってくると思いますし、それを見込んだときに、この地域が遅れを取ることをしないようしっかりとした施策を作り上げてほしいと思います。

そういう流れを先取りして、敏感にキャッチしていくという計画であってほしいと思います。

〈部会長〉

今までの10年で団塊の世代の方たちが大量に退職されて、今後の10年はその部分がどう継承されたのかによって違いが出てくる期間ではないかと思います。

〈部会員〉

若い人たちとの間にギャップが生まれていますから、そこをどのように埋めていくかということも課題になってくるのではないのでしょうか。

なので、これからはそうなるであろう、という先を見据えた計画づくりをしていく必要があるのではないかと思いますね。

高齢化の今後の推移についても、札幌や室蘭などと比べると率が低くなっていることがまだ救いと言えるのかもしれませんが。

〈部会長〉

施策のⅡ「地域に根ざした魅力ある学校づくり」の部分までのポイントとなるところを挙げていただきました。

今回はこの続きからということになりますがよろしいですか。

〈事務局〉

少し戻ってしまうのですが、今後10年間も不断の取り組みが必要となる「いじめ・不登校」の問題については、市民部会としても触れておく必要があるのではないかと考えております。

それと今、教育委員会制度が変革の時期を迎えておりまして、それが今後10年間

の教育にどう影響するのかということについても議論をしていただき、市民部会として触れておく必要があるのか、ということについてもご意見をいただきたいと思います。おまして、この部分については次回に少しお時間をいただければと思っておりますがいかがでしょうか。

〈部会長〉

では、今回はこの部分の掘り下げと、次のⅢ「青少年が健やかに地域で育つ環境づくり」から進めていきたいと思えます。

教育委員会制度については、改革されるということで方向性が示されておりますが、具体的な中身がまだはつきりと決まていない部分があるようです。

〈部会員〉

具体的にはどうなるのですか。

〈部会長〉

教育長と教育委員長が兼任ということになりまして、教育長を首長が選任するという形になります。

これまでは互選制でしたがそのあたりが変わってきまして、教育行政についても首長が責任を持ってやっていくということになります。首長の権限がこれまでより強くなるということですね。

〈部会員〉

反対です。

〈市庁内部会部会長〉

執行機関は、これまでと同様に教育委員会にありまして、すべてを市長が行うわけではありせんので。

〈部会長〉

では、それも含めて次回ということで、事務局から日程についてお願いします。

〈事務局〉

今回は、12月19日の金曜日、時間は17時30分からで、場所は第1委員会室を予定しておりますのでよろしくお願いいたします。